

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【文蔵小学校】

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	全体的には知識・技能の定着を図ることができている。学校課題研修で検討したデジタルドリルの活用の仕方を周知し、支援が必要な児童へ重点的に指導できるようにしていきたい。また、算数の「数と計算」の領域に課題がみられたため、単元の洗い出しをし、年間指導計画上に位置付けるなどとして、全学年で重点的に取り組み、改善状況を検証していきたい。
思考・判断・表現	『学びの指標』結果一覧を活用し、教師自身が課題を正しく捉えて授業改善を行ったことで、教師が教える授業から児童が学ぶ授業へ、という教師の意識の変容が見られた。また教師の授業づくりが変わったことにより、児童が学習ツールや課題を選ぶ機会が増え、それに伴い、児童が自分自身でそれらを選ぶようになってきた。引き続き重点的に実施するために、教科書単元を洗い出し、系統性をもって協働的な学びを推進しながら、自分の考えをもつことができる児童の育成を目指す。

①	今年度の課題と授業改善策	
	学習上・指導上の課題	授業改善策【評価方法】
知識・技能	<p><学習上の課題> 算数「数と計算」において、正答率が6割程度の問題があった。</p> <p><指導上の課題> 児童が反復・習熟に取り組む時間が十分ではなかった。</p>	⇒ プリントやドリル・パーク等を使い、基本的な計算等の反復や習熟に取り組む。【週1回の実施】 特に課題がみられた、小数や分数の計算やわり算の筆算、四則混合計算においては、スクールタッチボードの授業アンケートから児童の理解度を的確に把握した上で、低学年から系統性をもたせた指導を実施していく。【毎時間設定】
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 算数の「思考・判断・表現」に関わる領域では、他の領域に比べ、無回答率が高い。</p> <p><指導上の課題> 立式や説明に困難を感じている児童がいる。</p>	⇒ 自力解決につながるような工夫や手立てを立てた授業づくりを実践し、自分の考えをもつことができる児童の育成を目指す。【R6年度さいたま市学習状況調査「これまでの授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目において、肯定的な回答の割合が90%以上】

全国学力・学習状況調査 <小6・中3> (4月~5月)

⑤	評価(※)	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	朝の学習の時間を活用し、デジタルドリルやプリントに週1回取り組んだ。学校課題研修にて、デジタルドリルの活用しやすい場面や、児童の習熟度を確認しながら配信する方法を検討し、デジタルドリルの情報を授業改善に生かすことができた。また、スクールタッチボードの授業アンケートから、児童がどの程度理解しているのかを毎時間把握することができ、児童が苦手な箇所を把握し、追加の課題を与えることや個別に指導することができた。
思考・判断・表現	B	R6年度さいたま市学習状況調査「これまでの授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目での肯定的な回答の割合は89.1%であり、目標値には及ばなかった。しかし、『学びの指標』の第2回調査では「試したり繰り返したりして、答えを考えている。」の項目において、第1回調査よりも数値が上昇しており、児童の学びたい気持ちや意欲があり、その思いに応えるような授業づくりを実践できたことが分かる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語において、文の中における主語と述語との関係をつめる問題に課題がみられた。形式的に助詞から主語がどれにあたるか考えられている一方、長い文章の最初に表記されている単語を主語として選択していることから、文章の内容やつながりを考えて主語を選ぶことができていないことが、解答類型から分かる。正確な内容把握のためには、主語と述語の関係を押さえることは欠かせないので、丁寧な指導を継続する。
思考・判断・表現	国語において、目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する問題に課題がみられた。解答類型を見ると、取材メモから言葉や文を取り上げて書くことはできるが、考えたことについて触れられていない解答が多かった。国語に限らず、事実や結果と意見や考えを区別して書けるように、授業の振り返り等で工夫していきたい。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	ほとんどの教科において市平均正答率を上回っており、概ね良好な状況となったが、算数の「数と計算」の領域に課題がみられた。同集団経年比較では上昇しているものの、学年が上がると正答率が低下していることや、下の学年のうちから計算問題の無解答率が他に比べて高いことを考えると、より確実に学習内容の定着を図っていく工夫が求められることが分かる。
思考・判断・表現	どの教科においても市平均正答率を上回っていることや、同集団経年比較をしてみても前年度より平均1.65pt上昇していることから、良好な状況であると言える。一方、国語では一部の学年において正答率が低くなっていること、全ての学年において物語文での正答数が低かったり無解答率が他に比べて高くなっていることから、登場人物の言動や場面の変化に気を付けながら読む力を付けられるよう、授業改善に努めていく必要があることが分かる。

③	中間期報告	中間期見直し	
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	プリントやドリル・パーク等を使い、週1回基本的な計算等の反復や習熟に取り組むことができた。しかし、スクールタッチボードの授業アンケートについては、入力できている学年に差があった。今後、学校課題研修の中でも取り上げ、学校全体で共有し取り組んでいく。	変更なし
思考・判断・表現	B	『学びの指標』の設問「自分一人で、考える時間がある。」においては肯定的回答が多く、児童に自分の考えをもたせる授業づくりができていることがわかった。それに比べ、「試したり繰り返したりして、答えを考えている。」の項目はポイントが低くなっていた。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)